

## ベルリンからバンコクへ —国際標準化 (ISO) 会議で想ったこと—

From Berlin to Bangkok, 10 years in ISO meeting

森川淳子 Junko MORIKAWA

高分子の測定法に関する国際標準化機構 (ISO) の会議に参加するため、深夜近くにベルリンに降り立ったのは2001年のことである。9月初旬というのに、冷たい雨の夜であった。フィルムの熱拡散率測定法の標準化が目的であったが、電子部品の集積化が進み、材料の放熱や耐熱性が注目され、熱特性測定法の標準化が必要となったことが背景にあった。前年のポワチ会議での提案を受けて各国の熱伝導計測の専門家が会議に招集されていた。国際会議に精通し、洗練された物腰の議長 (スイス) や欧州各国の代表にはにこやかに迎えられたが、しかし、アジアからの参加はまだ少なく、女性となると唯一と言ってよかった。コーヒブレイクの洒落た会話はまるでシェイクスピアの古典を聴くようであり、立ち居振る舞い一つをとっても、文化の相違がひしひしと感じられた。

現存する装置と規格の調査を経て6カ国から9方法についての提案があり、スタンダード策定の標準化作業の大筋の合意を得たのは9月11日のことであった。つたない英語で何とか説明を行い、ほっとして宿に戻り、食事に出ようとした矢先、Conciergeに呼び止められた。9.11テロ事件であった。ベルリンの街は騒然となった。その後の多難な年月を象徴するかのような、幕開けであった。

ISOはジュネーブに本部をおき、毎年約250の技術本会議が開かれる。欧州石油化学産業の再編と生産拠点のシフトからみられるように、現在ではアジア諸国の活動が大変活発である。英米独仏に代表される西欧諸国の発言の影響は依然大きい。投票権はあくまで各国1票であり、その勢力図も激変の様相を呈している。参加者は企業、大学、研究所と多様であり、北米、東欧、東南アジアからは女性の代表も多い。原則として、標準化は特定の国や企業を利するものではなく、産業技術を通して万人のための共通の利益をもたらすためのものであるが、各国の専門家による技術本会議では、各国間の利害もからんで暫し紛糾することもある。ときに、国益や巨大プロジェクトの成否を担う議論の際に、Minorityかどうか、躊躇する猶予はなかった。

紆余曲折を経て、高分子の熱伝導率測定法を五つのパートからなる国際標準 (IS) として発効した。2008年12月のことである。その後、標準化に関連した賞をいただ

いた際、授賞式で審査委員長の小宮山宏先生に問われたことがある。なぜ標準化を志したのかと。答えようとして、一瞬言葉に詰まった。国際標準 (IS) 発効後に、何度も繰り返された問いかけであったからである。「測定法は産業界に普及して使われてこそ意味がある、どこまで世界に認められるか試してみたかったです……」と、絞り出すように言葉をつなぎながら、ふと気がついた。もっと止むに止まれぬ、研究者の衝動のようなものに突き動かされてきたのではなかったかと。具体的に標準化を志してから数えても十余年を費やした日々を想うとき、小さな実験室で、確認し続けたデータと小型化した装置を携え、世界を駆けめぐることのできた日々を、このうえもなく幸せに想うとともに、若く無名の一研究者の熱意に耳を傾ける、そのような度量が技術の世界には未だあり得ることを、多くの若い研究者に伝えたい。

2010年のバンコク会議では、さらに新しい分析法を提案した。会議の最後に議長から、「Ms Morikawaの熱伝導率測定法のIS発効に関する長年のリーダーシップに感謝する。さらに今後のScientificな新しい測定法の進展に期待する」とのコメントがあった。思わず耳を疑ったが、嬉しかった。議長との間には、方針を巡り、10年にわたる確執があったからである。

会議場を去るときに、ロビーでジャズ・コンボの演奏を聴いていた議長に偶然会った。気を付けてお帰りなさい、との言葉に、胸のわだかまりが解けた気がした。父ほどの年齢の議長には、無謀な勢いの若い研究者には思い至らぬ数々の配慮もあったであろう。9月のバンコクも雨であったが、東京の酷暑に慣れた身体には、暖かく優しい雨であった。



2004年6月ウィンザー城の前で、英国物理学研究所 (NPL), Dr. Sims と。右側筆者の持つ銀色のB5サイズのトランクの中に、熱拡散率測定装置が入っている。遠景のユニオンジャックは女王陛下がご滞在中であることを示す。



森川淳子 Junko MORIKAWA

東京工業大学大学院理工学研究科  
有機・高分子・物質専攻  
助教、博士 (工学)。  
専門は熱物性ならびにその計測法の開発。